# 本

天沢退二郎

「その木は花を四度つけた、ひとつの季節
に
そして実を三度つけた、ふたつの季節に
そんな木を五本持っていたら
わたしは種子を幾粒得るか、四つの季節
に」

それは算数の本？　それとも農芸の教科書？
すくなくとも幾度目かの幼時、ぼくはうすぐ
らい巨木の蔭に莫蓙を敷いて日がな一日その
問題集をめくって暮した。ときどきヒヨドリ
が木々の間を低く疾翔してきて、喚きとも葉
ともしれぬものを撒いたり、賢しくきらびや
かなポンプ押しどもが血紅の兜（ヘルメット）を光らせて出

没したり果ては遠くから煙がまるで女のように紐のように届いたりしたが、ぼくは呆心よりなお透明な帽子を被て、採り得べき種子の形と数とをノートに試し書きした。

「その人は死を四度死んだ、ひとつの生に
そして本を七冊書いた、ふたつの生に
そんな本を幾冊書いたら
わたしは詩が一篇でも書けるか、四つの
生に」

それは何の本、詩の本それとも経営法？　すくなくともぼくの知るかぎりそこには幾枚かの、どう向けても逆様に見える図版があるだけなのだ。